令和８年度
第１回　あきた埋文出張展示
パンフレット

秋田の貝塚

出土品でたどる、環境の変化と命のつながり

写真：柏子所貝塚出土品

秋田県埋蔵文化財センター

はじめに

秋田県をはじめ日本海側は、太平洋側との海水の行き来が制限されていることから干満の差が小さいことが特徴です。また、貝類の生育に適した遠浅の海が発達しないことから、貝塚がとても少ないと言われています。事実、秋田県で発見された貝塚は 10 か所に及びません。

しかし、貝塚は、陸産・海産動物の骨や歯、そしてそれらから作られた様々な道具の保存状態が良く、縄文時代の食文化や狩猟漁撈技術を具体的に知ることができる貴重な遺跡です。加えて、出土する貝類や遺跡立地から気候変動による海水面の上昇と下降を分析することも可能です。

昨今、人類の活動が引き起こす温暖化に伴う異常気象は、縄文時代に進んだ温暖化と海進によく重なります。急速に変動する自然環境に対して適応を試みた縄文人の生活を貝塚から読み取り、縄文人の知恵と工夫を学ぶとともに、刻々と変化していく世界と向き合い、思考を巡らす機会になれば幸いです。

令和８年７月
秋田県埋蔵文化財センター所長　袴田 道郎

海岸線復原図について

本紙４・５ページに掲載した図は、海進最大期（今から約 6,000 年前）と海退期（今から約 5,000 ～ 2,500 年前）の海岸の様子を比較したイメージ図です。海進最大期の実際の海水面は、現在よりも２～３ｍ高かったとされています。しかし、八郎潟周辺は構造的な隆起地形であるため、単純に海水面を３ｍ上げるだけでは現在の陸地がほとんど海に沈みません。そこで、過去の地質データから確実に海に沈んでいたことが明らかな範囲に合わせて、海進最大期は現在より８ｍ、海退期は現在より５ｍ海水面が高かったと設定して図を作成しました。

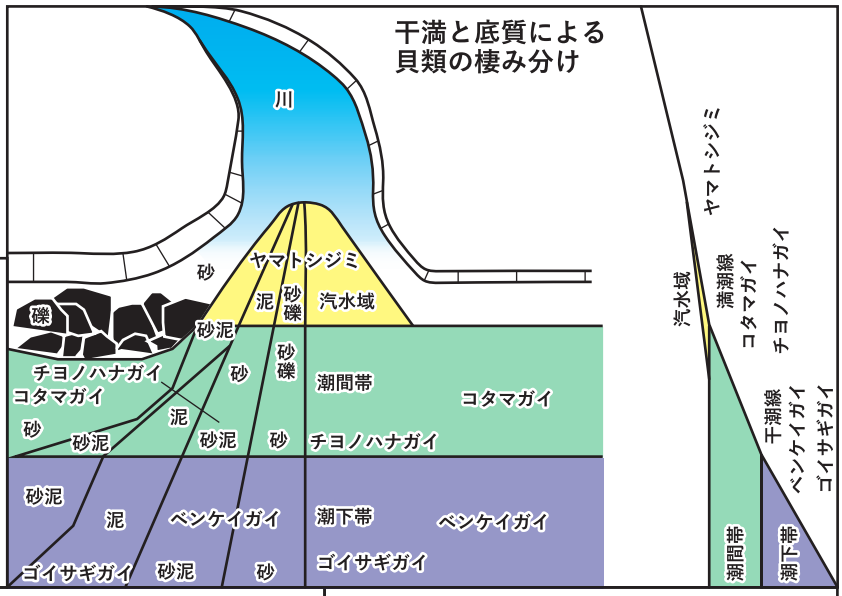
具体的には、以下の手順で作図しています。

① 国土地理院が公開している地理院タイル（色別標高図、陰影起伏図、電子国土基本図）及び基盤地図情報「数値標高モデル」10ｍメッシュから現代の鳥瞰図を作成する。
② 海進最大期の海水面標高を現代よりも８ｍ高く設定して、標高８ｍ以下の場所を水域として青く塗りつぶす。
③ 海退期の海水面標高を現代よりも５ｍ高く設定して、②と同様青く塗りつぶす。
④ 米代川河口南側から雄物川河口北側までの砂丘列は、地形・地質データにより海面より下に沈んでいたことが明らかなことから、青く塗る。
⑤ 海退期の図には、砂嘴の発達に伴なって形成された、小島状の砂洲や潟湖を描く。
⑥ 秋田県ウェブサイト「秋田県遺跡地図情報」に掲載されている遺跡の経緯度を基に、遺跡の位置を図に描く。

温暖化と海進

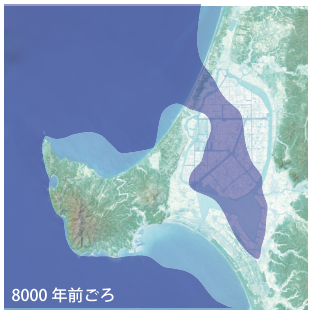
11,700 年前、完新世が始まり、海面が上昇をはじめました。

貝類は、水域環境の変化を敏感に反映するので、貝塚出土貝類の組成を調べると、人類の選択が分かります。

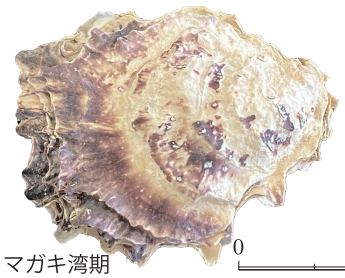




日本海に太平洋の海水が大量に流入し、50m 以下の深海域にも酸素が供給され、生態系が復活する。



八郎潟の貝類卓越種



マガキ湾期

秋田県の貝塚出土貝類卓越種

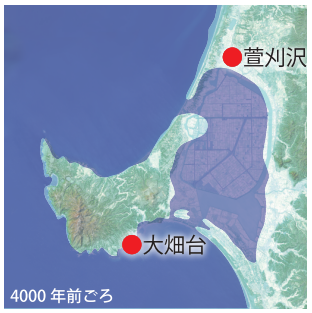
海岸に露出した岩石に着床するマガキが大発生する。急速な海進により、海底は泥底である。マガキを大量に利用する貝塚は、秋田県では未発見。ハイガイの貝塚がないことも特徴。
大河川河口域では、汽水域に生息するヤマトシジミが卓越する（子吉川河口域の菖蒲崎貝塚）。





ゴイサギガイ湾期

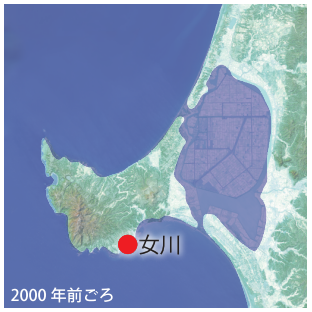
海進が最大となる。陸上からの砂が混じり、海底は砂泥底となる。底質の変化に伴い、マガキが衰退してゴイサギガイが卓越品種となる。しかし縄文人には利用されておらず、貝塚から出土してもごくわずかである。男鹿半島では角間崎貝塚が形成されるが、内湾砂底に生息する品種が利用されており、潮間帯泥底を好むヒメシラトリや潮下帯砂泥底に棲むゴイサギガイは利用されていない。





チヨノハナガイ湾期

海進から海退に転ずる。八郎潟には南北に砂嘴が発達し始める。海底は砂泥底から泥性が強くなる。底質の変化に伴い、ゴイサギガイが衰退してチヨノハナガイが卓越品種となるが、縄文人には利用されていない。八郎潟北岸では萱刈沢貝塚が形成されるが、内湾砂底に生息する品種と汽水域に生息するヤマトシジミを利用。

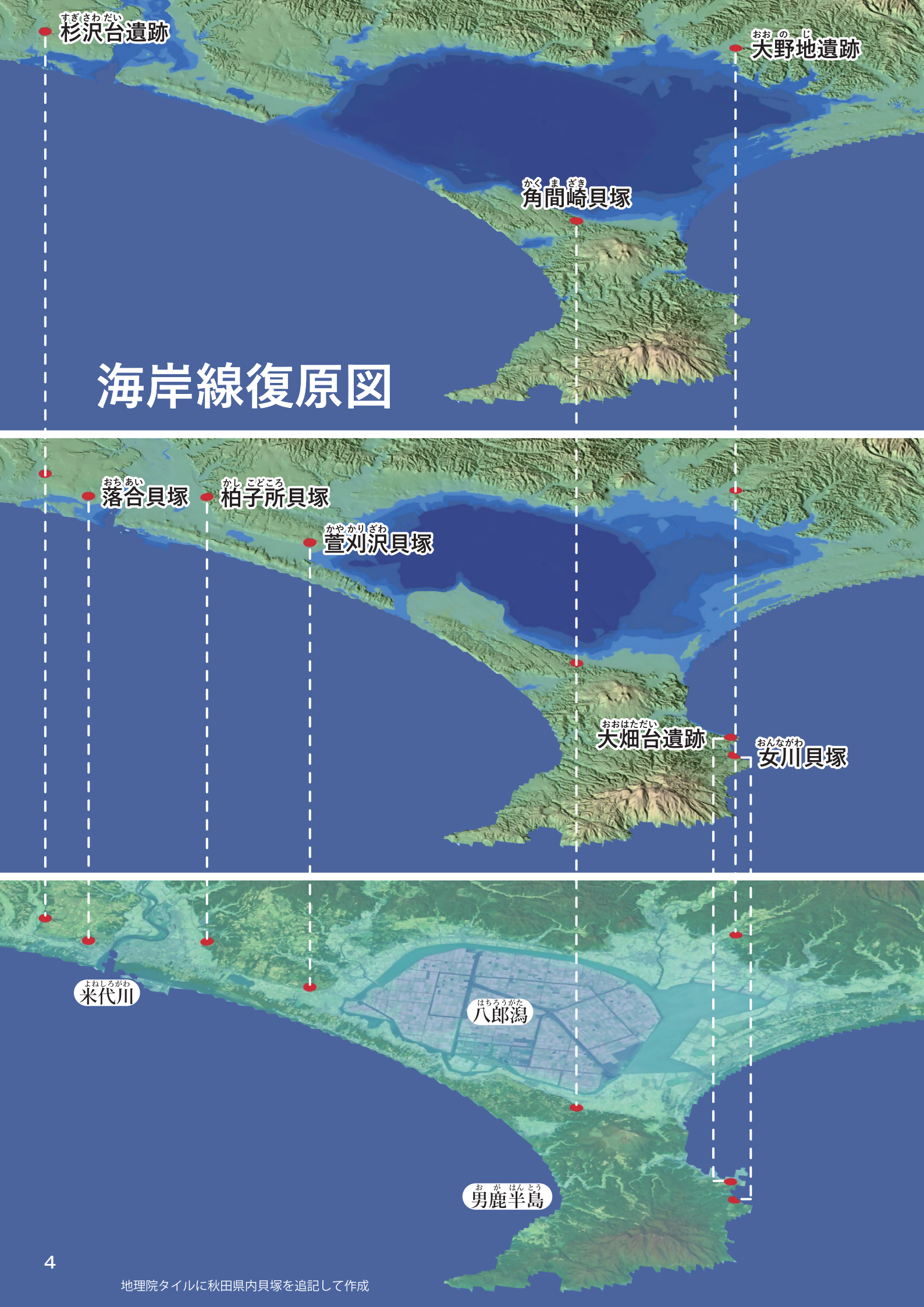




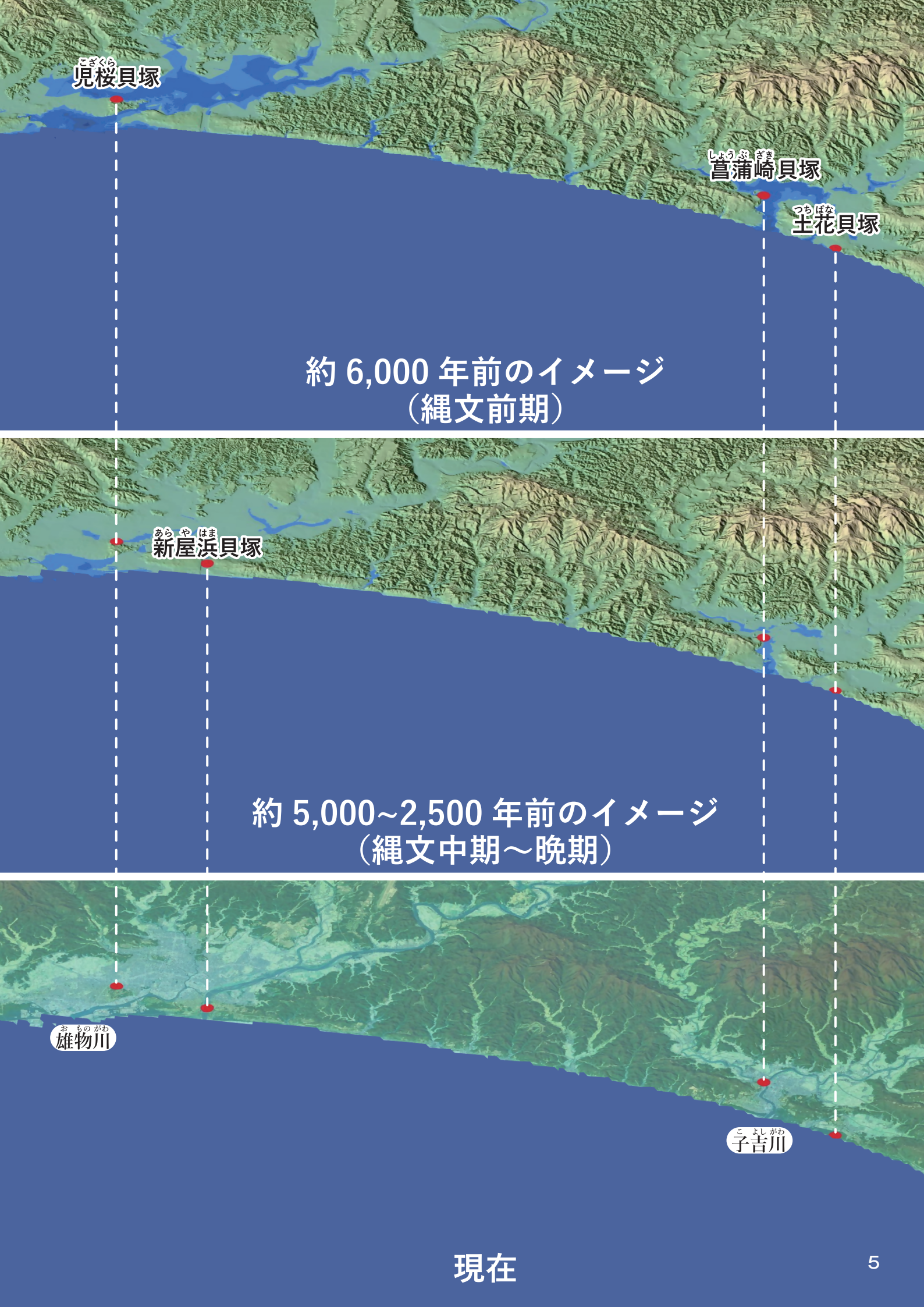
ヤマトシジミ湾期

海岸線が安定する。八郎潟の閉塞が進むが、南北に水道が維持され汽水湖化する。汽水化によってヤマトシジミが卓越種となる。縄文人たちは、ヤマトシジミを積極的に利用する。男鹿半島南岸には女川貝塚、米代川左岸には柏子所貝塚、雄物川左岸には新屋浜貝塚がそれぞれ形成される。女川貝塚は内湾砂底種、柏子所貝塚と新屋浜貝塚は、外海に面した砂底生息種のコタマガイを多く利用。

現生貝類標本は、秋田県立博物館所蔵の渡辺浩記コレクションを撮影。八郎潟の卓越貝種を指標とした湾名は、三位（1960）に従う。
貝類の生態と棲み分けについては、県立博物館の元学芸員渡部晟氏のご教示による。
海岸線復原図は「大潟村地下の地層と貝化石」（大潟村教育委員会、2013）をトレースして作成。



地理院タイルに秋田県内貝塚を追記して作成


児桜貝塚
菖蒲崎貝塚
土花貝塚
約 6,000 年前のイメージ
（縄文前期）
新屋浜貝塚
約 5,000~2,500 年前のイメージ
（縄文中期～晩期）
雄物川
子吉川
現在

菖蒲崎貝塚 由利本荘市

秋田県最古の貝塚

菖蒲崎貝塚は、秋田県由利本荘市の子吉川と芋川が合流する河川敷に位置する遺跡です。約 7,200 年前から 6,700 年前（縄文時代早期後葉から前期初頭）を中心に、人々の生活痕跡が重層的に残されています。貝層の範囲は 900 ㎡以上あり、間層を挟んで上下２層に分かれます。

全国に約 2,400 か所存在する貝塚のうち、日本海側に位置するのはわずか 40 か所ほどしかありません。遠浅の海が発達しにくい日本海側の海抜０ｍ前後に形成された遺跡は、海進によって深く埋没していたり、海退に伴う浸食によって失われたりして、現在その存在を認識できるものは少ないからです。本貝塚は、まさに貴重な発見といえるでしょう。



→が浸食面。Ⅳ層と下部貝層との層界が不整合となる（再寒冷化）。

アサの実を利用する

芋川左岸の自然堤防背面に残された土器の内側には、アサの実がびっしりとこびりついていました。アサは茎から繊維を採るだけでなく、その果実は高カロリーの食品になり、油をとることもできます。

近くから集石炉や水場遺構も発見されていることから、石蒸料理やアサから繊維を採るための蒸し加工をしていた可能性があります。

中央アジア原産とされるアサが、縄文時代早期には有用な植物として人類に持ち込まれ、積極的な利用がされていたことを示す貴重な証拠となりました。



内面にアサの実がこびりついた土器
（型式名未詳だが、早期赤御堂式並行期か）

温暖化の様子が見える貝塚断面

下部貝層の上面（→部分）は浸食され削られています。

浸食を受けたということはこの時、海面が下がって（再寒冷化）子吉川が再び陸地を削り始めたことを示します。

その後、再度海面が上がり始めた（再温暖化）ことでⅣ層が堆積を始めます。

氷河期が終わった後の温暖化過程は、単純ではないと言われてきました。寒の戻りと再温暖化を何度も繰り返しながら、海水面が上昇したその様子を目の当たりにすることができるのが、この貝層断面なのです。

柏子所貝塚 能代市

貝輪づくりの拠点と集落の墓地

能代市にある柏子所貝塚は、米代川左岸にある台地の斜面に形成された貝塚です。約 2,600 年前から 2,500 年前（縄文時代後期末葉から晩期前半）にかけての重要な遺跡として、昭和 30（1955）年に秋田県指定史跡となっています。

本貝塚の重要性は、３点あります。１点目は、８体もの埋葬人骨が発見されたことです。７体が屈葬位をとっており、２体には抜歯が施されています。また、４基の墓坑にはベンガラが撒かれるなど、縄文時代晩期の葬法が明らかになりました。

２点目は、1,270 点に及ぶ大量の貝製品（特にベンケイガイ製貝輪）が出土し、その未成品の多さから貝輪の製作拠点であった可能性が高いことです。

３点目は、骨角器の保存状態が良好であり、釣針や刺突具、装身具など多種多様な遺物から、当時の生業と物質文化を具体的に知ることが出来ることです。

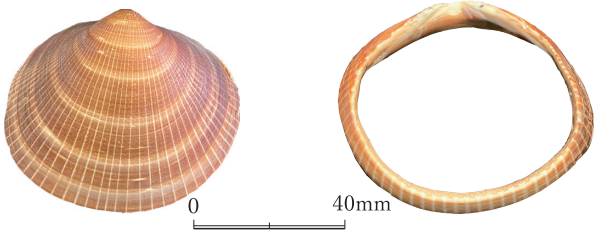
柏子所貝塚は、人の「お墓」と貝輪製作によって発生する失敗作や未成品、未使用品を埋納するモノの「供養場」、そして食べ物の廃棄物を捨てる「ゴミ捨て場」の役割を持っています。単純なゴミ捨て場とは言い切れない「墓域」としての性格を併せ持つことから、縄文時代の社会組織や交易、精神文化を解明する上で重要な遺跡です。

貝輪の生産

本遺跡からは、1,270 点もの貝製品が出土しています。その大部分はベンケイガイ、サトウガイ、イワガキ等を材料とした貝輪です。

発掘では、139 点の貝輪が束ねられたようにまとまって出土したことが、報告されています。

また、完成直前の資料だけでなく、中央を打ち割っただけの製作開始直後の段階から、研磨途中の「未成品」、途中で壊れた「失敗作」も多く見つかっています。これらは、未発見の「工房」から出た廃棄物であると考えられます。



ベンケイガイ
飴色の地に白い放射肋が美しい
秋田県立博物館所蔵　渡辺浩記コレクション

ベンケイガイ製貝輪（復元）

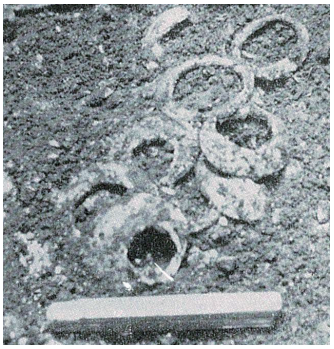
生業との関連

貝塚に食料残渣として捨てられた貝は、コタマガイがほとんどです。コタマガイは、外海に面した砂底潮間帯に棲んでいることから、人々は貝塚から数 km 離れた海岸まで出て、食料となるコタマガイを採っていたはずです。

ベンケイガイはコタマガイよりもさらに深いところ（潮下帯、水深５～20m）に棲んでいるため、採るためには潜るか、年に一度起きるか起きないかの大量打ち上げのチャンスを狙っていたはずです。

つまり、ベンケイガイの獲得は、コタマガイを採集する労働の日々に期待される、掘り出し物のような「アタリの日」だったのです。



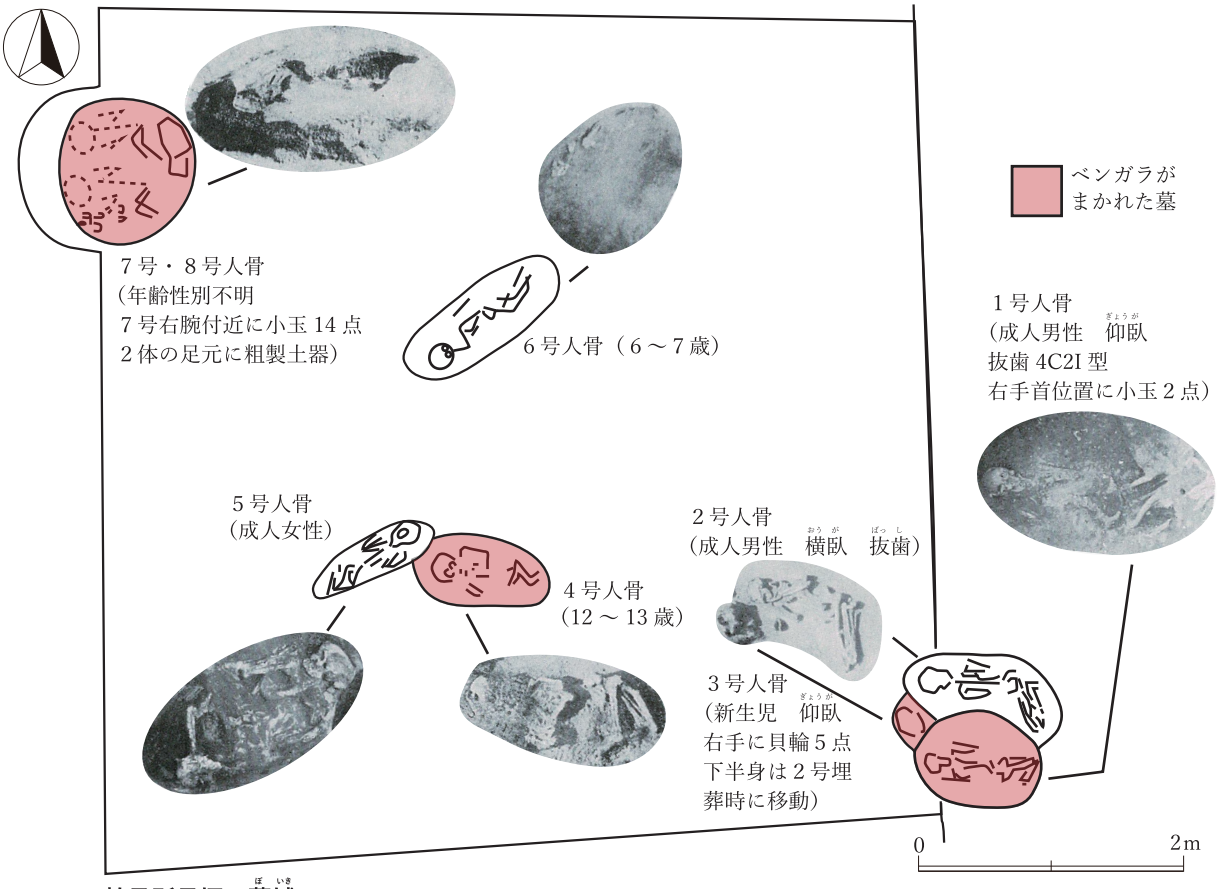


1957 年の第２次調査において第６トレンチ北西隅から検出された貝輪集塊
秋田県教委・能代市教委 1966
第６図・第 12 図



本荘西目地区で水揚げされたベンケイガイ
秋田県水産振興センター提供

柏子所貝塚　能代市



柏子所貝塚の墓域

秋田県教委・能代市教委 1966 『秋田県指定史跡能代市所在柏子所貝塚－第2次・第3次発掘調査報告書』第1図・第13図、
中村大 1995「柏子所貝塚　柏子所遺跡」『能代市史資料編考古』第413図をトレースし合成した。



2号・3号人骨

2号（右側　成人男性）と
3号（左側　新生児）
『能代市史資料編考古』第414図より



4号人骨

4号（12～13歳　性別不明）
頭部に赤く見えるのがベンガラ

柏子所貝塚の埋葬習俗

8体見つかった埋葬人骨の内、7体は屈葬されていました。

縄文時代後期以降、房総半島の貝塚群では伸展葬が増えますが、東北地方の晩期では屈葬が目立ちます。本遺跡でも、新生児である3号を除く全員が屈葬されていることは、埋葬習俗の地域性を考える上で重要な特徴です。

また、7体中5体は東部を西に向けています。残る2体は、体の向きを南西－北東軸に合わせています。埋葬人骨群がさらに小さなまとまりを持つこと、埋葬方向が統一的であることは、埋葬に当たって決まりがあったことを想定できます。

1号、2号と3号はすぐ近くに埋められていました。2号の腕の脇にあるV字形の骨は、3号の大腿骨です。

これら3体は合葬ではなく、最初に亡くなった3号の脇に、後に亡くなった2号を埋めています。2号を埋めたときに、3号の骨は動かされてしまいました。

3号は右腕にサトウガイ製の貝輪を5つ嵌めていたとされます。新生児に対する厚葬は、この子が集落で重要な役割を持つ一家に所属していたのではないかと想像させます。

協力　秋田県水産振興センター　秋田県立博物館　男鹿市観光文化スポーツ部
能代市教育委員会　三種町教育委員会　由利本荘市教育委員会　渡部晟
（敬称略 50音順）

発行　令和8年7月　編集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
TEL：0187(69)3331　FAX：0187(69)3330